



鴨居 玲
1982年 私
カンヴァス 油彩
縦181.6cm 横259cm 昭和57年(1982)
石川県立美術館蔵



ギュスターヴ・クールベ
画家のアトリエ
カンヴァス 油彩
縦359cm 横598cm 1855年
パリ オルセー美術館蔵
Musée d'Orsay, Paris ©ARTEPHOT/ K. TAKASE

作品解説

ギユスターヴ・クールベ

画家のアトリエ

「わがアトリエの精神的・物理的歴史」と自筆解説にある。パリ万国博覧会出展を目論んだ作品だが、政府の意向に盾突く画家の傲慢な挙動ゆえか、出品を拒絶され、会場ほど近くのモンテーニュ街の私設仮小屋で公開された。独立不羈のクールベ、時に三十五歳。

副題には「現実的寓意」なる不思議な文句が添えられている。ホメーロスが詩を、アリストテレスが哲学を寓意するというなら話も分かる。だが画面右手に見えるボードレールは当時まだ駆け出し詩人、ブルドンは出獄するや著作が発禁処分された社会主義者。寓意というには余りに「現実的」な友人たちだ。

画面右手の支持者に対して、左に描かれたのは密偵者に扮した仇敵、皇帝ナポレオン三世と、財務大臣フルードや司祭服姿の御用評論家ヴィヨラの取り巻き連だ、との説もある。そして中央には、周囲の闇を光明へと変貌させる魔術のごとく、故郷オルナンの風景が、画家自身の筆により生命を与えられて輝く。

芸術による世界の救済。いささか誇大な希望的な希望をオルナンの巨匠が託したと目されるこの大作は、規定の「死後十年」を待たずに八年にはルーヴル入りの栄に浴す。だが百五年の後《アトリエ》は《オルナンの埋葬》とともに、セーヌ対岸に落成したオルセー美術館に移送された。大絵画の伝統の最後を飾る作品から、近代の幕開けを告げる作品へ。その歴史的意義も大きな変更を迫られた。

(稲賀繁美)

鴨居玲

1982年私

白く塗りだけのカンヴァスを前にして、絵が描けず途方に暮れている画家自身を主題とした、極めて特異な自画像である。早すぎた死の三年前の個展で発表された、実質的な遺作と言っている。

絵の周囲を取り巻いているのは、鴨居玲がこれまでに描いてきた主役たち。すなわちスペインの田舎で、あるいはパリで、かつて時間空間を分かちあつた、酔っ払い、廃兵、物乞い、モデルといった、人生に深い影を引きずる庶民の姿である。だがその真つ只中にありながら、画家は呆然自失のいで、虚空に顔を向けたままである。真つ白いカンヴァスに向かって絵筆を取る意欲はすでに失せ、むしろ身を切るような孤独が痛々しい。

鴨居玲は金沢に生まれた。金沢美大に学び、宮本三郎の薫陶を得たが、後に南米、ヨーロッパ各地を放浪し、つぶさに見た庶民生活の哀歓を描くなかで、自己の表現世界を確立した。一九六九年、《静止した刻》で安井賞を受賞。四十歳代半ばにスペイン、マドリッド近郊の村バルデペーニャスに暮らした頃が、生へのアイロニーにあふれた、重い手応えの秀作を次々と生み出したことよって特筆される。

この作品は、日本へ戻ったのち、かつての緊張感を再現できず、病がちの生活にも倦んで、むしろ、のしかかる虚脱感、いやおそくは自分の死そのものを、正面から見据えたもの。近代絵画の創造概念を逆転する意図を秘めた、ニヒルな乾坤一擲と言えるのではないか。(宝木範義)

二枚の絵

二〇〇〇年五月一〇日 印刷
二〇〇〇年五月二五日 発行

編者 高階秀爾

平山郁夫

丸谷才一

和田 誠

編集人 山本 敦

発行人 山本 進

発行所 毎日新聞社

〒100-8051 東京都千代田区一ツ橋

〒530-8251 大阪市北区梅田

〒802-8651 北九州市小倉北区紺屋町

〒450-8651 名古屋市中村区名駅

印刷 東京印書館
製本 大口製本印刷

【非売品】

©Mainichi Newspapers Co., Printed in Japan, 2000